

学校コンサート随記記 ～盛岡・富山～

澁谷 直明

2010年11月は、まさに岡田博美さん月間でした。

11月3日（水・祝）盛岡、13日（土）東京・東京文化会館小ホール、16日（火）東京・紀尾井ホール（天満敦子さんとの共演）、20日（土）名古屋・平松クリニック、23日（火・祝）富山と続きました。この精力的なスケジュールの中、博美さん初の試みとして、4日・5日に盛岡で、24日に富山で、学校でのコンサートが行われました。このうち4日と24日に、幸運にも参加することが出来ましたので、報告させていただきます。

4日の盛岡は、市内愛宕町の市立下小路中学校の体育館で約600人の中学生を前に行われました。この学校の作山校長先生が、幸子夫人と同級生ということで実現した企画だそうです。使われたヤマハのピアノは、地元では有名なピアノの毛籐先生の楽器で、先生の死後、ご遺族が寄贈されたものだということです。

午前10時前に学校に着かれた博美さんは、体育館で軽く音を出されたあと、生徒の入場を待って、すぐに演奏に入られました。

曲目は、バッハ＝ブラームス「左手のためのシャコンヌ」、ドビュッシー「子どもの領分」全曲、リストの「二つの演奏会用練習曲」から「森のささやき」、ショパン「革命のエチュード」、サン＝サーンスの「左手のためのエチュード」から「エレジー」という、初心者向けといった妥協をしない見事なプログラムです。最後の3曲は、盛岡と富山のリサイタルで博美さんが



盛岡市立下小路中学校でのコンサートでの岡田さん

アンコールで弾かれた曲で、いずれも

左手が重要な役目をします。プログラムの最初と最後を左手だけの曲という、博美さんらしい考え抜かれた選曲です。

体育館の中央に置かれたピアノを、生徒が“コの字”に囲む中、曲目紹介を博美さん自らが行いながら、演奏が進みました。私は最後尾で聴いていましたが、生徒も真剣に聴いていました。

演奏終了後、お礼の生徒全員の合唱があり、質疑応答がありました。「音楽の道に進むきっかけは？」「1日どのくらい練習しますか？」などの質問に、博美さんは「小さい頃は絵

本代わりに楽譜を眺めていた」「練習は、そのときによって違うが、平均すれば1日5～6時間」などと丁寧に答えられていました。

生徒の感想文のいくつかを後日拝見しましたが、博美さんの演奏が生徒に強烈な印象を与えたことがストレートに感じられました。

24日の富山は、富山市から高速道路で30分強走った、砺波市深江の砺波市立出町小学校で行われました。地元で長年、合唱指導などの音楽指導にあたられている富山大学名誉教授の中村義朗氏のご尽力によるものです。この学校の合唱指導も行っておられるということでした。

会場は、普段は食堂としても使っているというホールですが、まるで教会のような素敵な空間です。学校全体もモダンでおしゃれなデザインで、時間があれば隅々まで拝見したい魅力にあふれていました。約500人の生徒が見守る中、演奏が始まりました。

曲目は、バッハ＝ブラームス「左手のためのシャコンヌ」、ドビュッシー「子どもの領分」から1、4、6曲、リスト「二つの演奏会用練習曲」から「森のささやき」、ショパン「革命のエチュード」というプログラムで、小学生用にやや数を減らしたとはいうものの、やはり妥協のない選曲です。

合唱コンクールの全国大会で優秀な成績を収めているというお話の通り、皆、最後まで熱心に聴いていました。お礼の校歌が、重唱になっていたのには驚きました。博美さんへの質問も活発で、時間があっという間に過ぎていきました。この日の演奏も、きっと生徒達に忘れられない思い出になったと思います。

今回のような試みが、今後も持続的に続くと良いと思います。今回は、学校でのコンサートが、いずれもリサイタルの直後でした。勝手な感想ですが、リサイタルの直前でしたら、演奏に感激した生徒が本格的に博美さんの演奏に再度触れることが可能だったわけで、その点は、ややもったいない気がしました。